社会学概論

担当：越智　博子　先生

カタカナ語認知度に対する調査報告

社会学部　総合文化学科

学籍番号：S2130999　池田　英二

# １　はじめに

　「レポート」、「コンピューター」、「コミュニケーション」など、現在、我々の周りにはカタカナ語があふれている。

　カタカナ語とは、「主に外来語、外国語、和製外国語、アルファベット略語のことを指す」[[1]](#endnote-1)言葉であり、日本に元々ある言葉ではない。しかし、現在では、カタカナ語は生活の一部となっており、カタカナ語を一切使わない日本人はいないと言ってもよい。

　一方、政治や経済の世界で使われているような、生活に密着していないカタカナ語の場合、知られていない言葉はもちろん、意味を知らずに使われている言葉も少なくない。

　文化庁の『国語に関する世論調査』では、カタカナ語の認知・意味の理解・使用状況を調査している[[2]](#endnote-2)。平成20年度の調査によると、「サンプル」「リフレッシュ」などは理解度が90%以上に達しており、平成14年度の調査と比べて、理解度が28.8%上昇したカタカナ語（「モチベーション」）もある。

　しかし、高橋によると、「語彙の理解度は、個人の生活環境[[3]](#endnote-3)により影響を受ける」ものであり、カタカナ語を知っているかどうかには個人差があると考えられる。例えば、新聞やテレビのニュースでは、日常生活ではなじみのないカタカナ語が多く使われているが、ニュースに多く触れる人にとっては、それらのカタカナ語は普通に理解できる言葉となるはずである。換言すれば、ニュースなどの情報に触れる機会の多い人は、カタカナ語をよく理解していることが予想される。

　そこで、高橋の言う「生活環境」とカタカナ語の認知度との関係を中心に調査を行うことにした。ここでは、特に、「生活環境」における「ニュース」[[4]](#endnote-4)に着目して調査を行う。なお、調査に際しては、次の2つの仮説を立てて調査し、その結果を検証することとする。

　[仮説1]

　普段から新聞やテレビのニュースなどから頻繁に情報を得ている人は、カタカナ語を多く知っている。

　[仮説2]

　生活に密着していないカタカナ語ほど、ニュースなどの情報を得ているかどうかで、調査結果に差が出る。

# ２　調査概要

## 2-1　調査期間と調査方法

　大学生100人を対象に、質問紙調査を行った。「文化社会学概論」講義と「言語社会学概論」講義時に、教員の協力を得て、受講者に質問紙を配布、その場で質問紙に記入してもらい、回収した。

　調査期間：20XX年6月15日～27日

　回収率：100%

## 2-2　調査内容

　質問紙で2種類の質問を行った。まず、情報（この場合はニュース）の入手経路について、「新聞」「テレビのニュース」「新聞・テレビのニュースの両方」「ニュースは見ない」の4つから選択、回答してもらった。

　次に、『国語に関する世論調査』で調査されているカタカナ語のグループ（イ）[[5]](#endnote-5)にある単語30語について、それぞれ「説明できる」、「何となく分かる」、「聞いたことがある」、「分からない」の4つから選択、回答してもらった。

# ３　調査結果と考察

## 3-1　情報の入手経路

　質問1について、情報の入手経路別の人数を集計したところ、以下のようになった。

* 新聞から情報を得ている人：25名
* テレビのニュースから情報を得ている人：29名
* 両方から情報を得ている人：19名
* ニュースをチェックする習慣のない人：27名

　次節以降、4つの情報入手経路別にカタカナ語の認知度についての調査結果を集計し、冒頭で提示した仮説に基づいて考察を行う。

## 3-2　仮説1に関する調査結果と考察

　仮説1について、質問1で分類した情報の入手経路別にカタカナ語の認知度[[6]](#endnote-6)を集計した結果は、次の表1と図1のようになった。

表 1：情報媒体別のカタカナ語認知度

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 両方 | 新聞 | TV | 無し |
| 説明できる | 20.2% | 10.4% | 9.8% | 4.3% |
| 何となく分かる | 25.1% | 22.1% | 19.4% | 14.1% |
| 聞いたことがある | 22.8% | 23.5% | 23.7% | 16.7% |

図 1：情報媒体別のカタカナ語認知度グラフ

　新聞やテレビニュースなどで情報を得ている人は、どのメディアも利用していない人に比べてカタカナ語の認知度は高かった。また、テレビニュースと新聞の両方から情報を得ている人は、新聞のみ、テレビのみで情報を得ている人よりもカタカナ語を説明できる人の割合が高かった。

　以上のことから、新聞やテレビニュースなどで情報を得ている人は、情報を得ていない人に比べてカタカナ語を知り、意味を理解していることが分かった。これは、仮説1を立証する結果である。

## 3-3　仮説2に関する調査結果と考察

　生活に密着し一般的な日本語として使われているカタカナ語と、専門用語のカタカナ語で比較したときも、仮説1の結果と同様の結果が得られるのだろうか。この問題関心から仮説2を立てた。

　仮説2を検証するために、カタカナ語別での「聞いたことがある/何となく意味を知っている/意味を理解し、説明することができる」人の割合を調査することにした。

　まず、カタカナ語別での違いを調査するために、調査対象となるカタカナ語群を3等分した。

　A群：認知度が上位1位から10位

　B群：認知度が上位11位から20位

　C群：認知度が上位21位から30位

　次に、3等分したカタカナ語群ごとに、「知らない」、「聞いたことがある」、「何となく意味を知っている」、「意味を理解し、説明することができる」の4項目の選択肢に分けて質問を作成した。その調査、集計結果が表2～4である。

表 2：情報媒体別のカタカナ語認知度(A群)

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 両方 | 新聞 | TV | 無し |
| 説明できる | 37.9% | 21.2% | 20.0% | 10.4% |
| 何となく分かる | 31.6% | 39.2% | 33.1% | 30.0% |
| 聞いたことがある | 23.7% | 27.2% | 30.3% | 29.6% |

表 3：情報媒体別のカタカナ語認知度(B群)

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 両方 | 新聞 | TV | 無し |
| 説明できる | 18.9% | 8.8% | 8.3% | 1.9% |
| 何となく分かる | 32.1% | 22.8% | 21.7% | 8.9% |
| 聞いたことがある | 30.5% | 34.8% | 31.7% | 14.1% |

表 4：情報媒体別のカタカナ語認知度(C群)

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 両方 | 新聞 | TV | 無し |
| 説明できる | 3.7% | 1.2% | 1.0% | 0.7% |
| 何となく分かる | 11.6% | 4.4% | 3.3% | 3.3% |
| 聞いたことがある | 14.2% | 8.4% | 9.0% | 6.3% |

　表2～4をグラフ化したものが図2～4である。

　図2を見ると、それぞれの認知度に目立った違いは見受けられない。このことから、よく知られているカタカナ語については、どのメディアで情報を得ているかはあまり関係がないことが読み取れる。つまり、よく知られているカタカナ語は一般に浸透している言葉なので、ニュース以外の場でも知ることが可能な言葉であり、生活に密着しているカタカナ語の認知度は、情報を得ているかどうかに比較的左右されないということがこの結果から読み取れる。

　しかしながら、新聞もテレビも見ている人は他の人に比べて「説明できる」人の割合が高い。このことから、カタカナ語を「知っている」というレベルではニュースを見るかどうかにあまり違いはないものの、カタカナ語を理解するには、複数のメディアで情報を得ることが必要であると言える。

図 2：情報媒体別のカタカナ語認知度グラフ(A群)

　次に図3を見てみよう。新聞から情報を得ている人、テレビニュースで情報を得ている人、両方から情報を得ている人の間では大きな差はないものの、どちらからも情報を得ていない人のみ、認知度が情報を得ている人の半分以下になる。

図 3：情報媒体別のカタカナ語認知度グラフ(B群)

　このことから、一般に浸透している言葉から少し認知度が低くなった言葉を知っているかどうかは、ニュースの情報を得ているかどうかと関係性があると言える。

　また、この結果でもA群の調査結果と同じように、カタカナ語を理解し説明できる人の割合は、複数のメディアから情報を得ている人のみ高くなっている。

　最後に図4を見てみよう。新聞から情報を得ている人、テレビニュースで情報を得ている人、どちらも利用していない人の間では大きな差はないが、両方から情報を得ている人のみ、認知度が他の人たちの約2倍となっている。このことから、片方のメディアだけで情報を得るよりは、両方のメディアから情報を得る方が、カタカナ語の認知度が上がることが分かる。

図 4：情報媒体別のカタカナ語認知度グラフ(C群)

# ４　まとめ

　今回は、「普段から新聞やテレビのニュースなどから頻繁に情報を得ている人は、カタカナ語を多く知っている」という仮説を中心に調査を行った。

　その結果、ニュースを見ている人は、見ていない人に比べてカタカナ語を知っている人が多いことが分かった。これは仮説1の通りである。

　また、カタカナ語別で見ると、生活に密着しているような、一般的によく知られているカタカナ語は、ニュースを見ているかどうかで認知度は比較的変化しないが、全体的に知られていないカタカナ語になると、ニュースを見ているかどうかによって認知度が変化することも分かった。さらに、その認知度は、新聞だけ、テレビニュースだけ、といった単一のメディアで情報を得ている人よりも、新聞もテレビニュースもチェックする人のように、複数のメディアで情報を得ている人の方が高くなる。

　また、認知度にあまり違いがない場合でも、言葉の意味を理解している人の割合という面から見ると、複数のメディアからニュースを得ている人が、よりカタカナ語の意味を理解していることが分かる。

　このことから、カタカナ語の語彙力を高くするには、さまざまなメディアに接触して、ニュースなどの情報を得ることが有効であると言える。

参考文献

高橋刃一「戦後日本のことばの変遷」『外来語研究』第6号、日本外来語学会、20XX年、23～37頁。

のあ日本語辞書制作委員会『のあ日本語辞書』noa新書、20XX年。

高橋刃一「生活環境と語彙力の相関性」山口正（編）『おかしな語彙力』、いのしし書院、20YY年、11～32頁。

文化庁『平成20年度　国語に関する世論調査』http://www.bunka.go.jp/kokugo\_nihongo/yoronchousa/h20/kekka.html（2017/09/30アクセス）。

1. のあ日本語辞書制作委員会、20XX年、201頁。なお、本レポートではこの文献の定義に基づいて、調査と考察を行う。 [↑](#endnote-ref-1)
2. 文化庁が平成7年度から毎年実施している世論調査だが、カタカナ語の認知度に関する調査は、平成14年度、平成20年度に行われている。平成20年度の調査では、60語のカタカナ語について調査をしており、認知度、意味の理解度、使用度について、それぞれ上位と下位の10位ずつまでを算出している。 [↑](#endnote-ref-2)
3. 高橋が言う「生活環境」とは、読書量や家庭環境など、さまざまな要素が複合的に組み合わさったものである（山口（編）、20YY年、13頁）。 [↑](#endnote-ref-3)
4. 高橋は、山口が指摘した「生活環境」をさらに30の項目に分け、その1つに「ニュース」を挙げている。高橋が言う「ニュース」とは、新聞やテレビなどの報道から得られる情報のことを意味している（高橋、20XX年、24頁）。 [↑](#endnote-ref-4)
5. 文化庁の調査では、調査の全対象者を2つのグループに分けて、それぞれのグループに、カタカナ語が30語ずつ挙げられた異なる回答票を割り当てて調査を行っている。文化庁の回答票は、（イ）と（ロ）に分けられているが、このレポートでは、回答票（イ）に挙げられているカタカナ語を調査対象とした。 [↑](#endnote-ref-5)
6. 本調査では、各単語について、「説明できる/何となく分かる/聞いたことがある」と回答した人の割合の合計を「認知度」と呼ぶことにする。 [↑](#endnote-ref-6)